

『反古典考』 まだ古典は、日本人の柄じやない

橋爪大三郎

誰か「古典」をまじりて信下ないこの国で、古典をどう向き合えようというのが、まずは、とびだせ過激な知性！

古典は知の場外乱闘である

◆古典を読むなんて、考えただけでもかつたらいが、なかに、いやとなりやぞうもなないこと。——こんなふうにかをくつてるとしたら、それは甘い。あわてて岩波文庫のページをめくってみたら、古典が読めたことにはならないよ。

◆そもそもだが、古典言「古典」のなだらうか？ 本屋でにぎわう活字もあらかたは、あふくと消えてゆく。社会的メカニズムの現時点にすつかり支配され、生産消費されているだけでは、時代の歯車がひとつ回るとひとまりもない。だがなかには、あゝここに、この社会的メカニズムそのものを生産する、でも思想をいっ進めもある。正真正銘の古典がこれで、いくつもの時代を支え続けていくともしない。この違い。

◆そういう古典を、ひとに頼らず、自分でみつげ出すのがまず大変だ。だがやつとみつげても、いや読みこなそうとする、日本人の場合、実はもひとつ大きな困難を覚悟しないといけない。二段階で話しよう。

◆まず一般に、いわゆる古典を読むコツですが、これ言葉が徹頭徹尾、現在のことなんだ、とわかれればいめたもの。ところが日本では、肝腎のこの伝統がねとくれたり、切断されたりして、ややこしいことになって、いる。

◆日本でのテキストの堆積の仕方に、いくつ特徴がある。まず、テキストと文字が、一緒に、海を渡ってやってきたこと。中国は文字とおり世界の中心、文明の範疇そのものだった。ろくな知的言語のないところへ、いきなりこの高度な識字能が乗りこんできたわけだから、それ以前の社会的メカニズム（聖書社会の）とはとんでもないギャップを生じる。これをなんとかせよとやらなら、ゆるゆるに、ゆるゆるに千年はかかった。ところがまた、もとの木阿彌。こんどは幕末から明治にかけて、儒学・国学の伝統が立ち枯れていく。いっぽう、ヨーロッパ系統の新たな識字能が、店開きする。漢文テキストの語彙のうそに、翻訳テキストが増殖する。この奇妙な状況が、今日まで続いていくわけだ。ここでもことごとく社会実態との大きなギャップが控えている。いわゆる古典を詠いた人々には、思いもよらないことかもしれない。

日本と西欧のテキストの相違

◆ヨーロッパ世界で古典といえは、「聖書」を抜きに語れない。「聖書」はまず何より、契約（神と人間）の書であった。人間の勝手な都合でいらいち変化してくるようなやわやわな代物でない。その意味内容は、人間の働きかけ解懸から独立に、動かしがなくそこにあると信じている。——こんなふうにテキストに縛られたままだと、社会は窒息してしまふ。だがうまいことにヨーロッパには、異教的な人文主義の伝統もあつて、キリスト教と交配を繰り返した。その結果、真理のテキストは固定したものでなく、だんだんに更新されていくものである、という理解が定着する。こうして花開いた言説の典型が、科学にはかならない。科学の運動が

古くなつたら古典じやないわけです。本はみな人間の書いたもので、貌もあれば人格もある。強烈な叫びに満ちている。人類の先頭を孤軍奮闘する、みいだれた才能の叫び。古典はこのみで、切迫したパフォーマンス、知の場外乱闘なのだ。この躍動がびんぶん伝わってこないうちは、古典を、読んだなどとはおこがましい。

◆古典とこんなふうには感じするには、読む側でも自分なりの課題意識をちゃんと持つていないとね。この社会を生きた足腰が、ふらふらしているあいだ、古典は読めども読めず、見れども見えずで当たり前なんです。で、めいめいどんな課題を見つけたか。それは結局、時代を読み解く能力（リテラシー）の問題だと思ふけど、この能力（リテラシー）自体も、数多くの古典と触れあうなかで鍛えられていく。鶏とタマゴみたいな関係があつて、この連鎖が古典をばくばく伝統をわけけていく。

◆古典の読み方はこんなところだけれども、これはいらいおの公式見解。ちよつと気の利いた人なら、いやあんまり気の利かない人でも、誰でも言つて、これや戦後知識人どまり。もひとつ、古典読みに日本人向けの裏ワザがある。

◆テキストが歴史的に堆積したからといって、そのまま古典じやない。それを読む伝統識字能が大切だ、とのべた。

◆開始される頃になつていよいよ、古典—時代が進んでも古くならないテキストも、ほんとうのいみで成立した。古典あつての知の最前線である。

◆ヨーロッパの始めた近代は、知識も社会秩序も可塑的で、言語によつて成り形される。人間を言語の配列としてみるわけです。ことごとくともつきあわないと、他者はおろか自分とも出逢えない仕組みになつて、いる。それにヨーロッパの知識人はイエスを意識して、つい力みがえつて頑強つてしまふ。小説という制度、芸術という理念。

◆中国はこれとだいが違つた。テキストは聖人（権力者）の手になる。ふつうの人間にはオリジナルを上回るテキストを生産する能力がなくて、せいぜい注釈をつけるだけ。文学より政治が優位するの、こういう理由からだ。

ことごとく—意匠の歴史を切開する

◆さて、自分の生きる社会的メカニズムと自分の口にする言語の内容とが、どんなにかけ離れていようと気にしない。——日本の原体験は、そんな感覚だった。だからヨーロッパ經由の知的言語も、どこか嘘くみをぬぐえないまま出回つて、いる。中国經由の言語が居すわつて邪魔して、るから、というわけじやない。昔からこうだった。この土地で、ひとはことごとく生きたよと思わないし、自分の生き様をことごとく表現できると思わない。ことごとくならぬことごとくはのあわいにこそ真実が宿る、と誰もが信じている。モダニストたちも嘆いたように、所詮ことごとくは知的な意匠であり、なしでもすむ装飾であり、己れを隠す擬態であり、威信を張るための戦略であり、いざとなればかたがかり捨てたこと。誰もことごとくを裏書きせず、誰もことごとくをまともには信用しない。価値下落した分だけ、ことごとくは流通速度（新陳代謝）がはやまつてしまふわけだ。

◆こうして戦後思想も、まともなテキストひとつ残さずいまま、は退場のときをむかえた。その嘘つばきの象徴こそ、日本国憲法である。国民の総意にもとつつかいというけ

1988-20

『リブラリア』vol.0 154-155頁 1988年11月
発行：鱒インターシフト 発売：清水弘文堂

れど、誰がみてもこの憲法、日本独立の条件になつては、明らかなで、実態はアメリカとの条約に等しい。戦後を支えるには美しい形象であるはずの憲法、それが、ことごとく裏腹な権力実態を隠しているとは、——かもそのまん中には、日本的な識字能と権力工学の象徴—天皇が鎮座している。

◆こんな具合で、戦後を支えた社会的メカニズムを、誰ひと、とことん正当化—言語化しようとは思わなかつた。思つたつてできやしない。とてもいやだが、まだまだ古典は日本人の柄じやない。幾度かみまつた知の活断層と、テキストの特異な堆積—これらを計測し、切開し、暴いてみせる過激な知性が、とびだして、まともなことを喋り始めるのが先決なの。自分がどういでもないでいるくせいで、いま何が国の古典たりうるか、決めてほしいなとは無理な相談だ。